正気を失わせる音楽の魔力
クライストの『聖ツェツィーリエ』における「伝説」の諸相[1)]

杉林　周陽

1．はじめに

ハインリッヒ・フォン・クライストは1801年５月21日付けの書簡で次のように書いている。

> しかし，カトリックの教会以上に心の奥底を深く感動させられたと思った場所はどこにもない。そこでは最も偉大で崇高な音楽が，さらに他の諸芸術の方へ歩み寄り，心を無理矢理（gewaltsam）感動させる。〔…〕我々の礼拝は礼拝ではない。それはただ冷たい悟性には語りかけるだけだが，カトリックの祭式はあらゆる感覚に語りかける。祭壇の真正面，その段の一番下で，他の人たちからすっかり離れて，一人の庶民がいつも，上の段へ頭を垂らし，熱心に祈りを捧げながら跪いていた。いかなる不信も彼を悩ますことはなかった。彼は信じているのだ —— 私は彼の隣に身を投げ，泣きたいという名状しようのない羨望を抱いた —— ああ，たった一滴の忘却さえあれば，僕は喜んでカトリックになるだろうに ——。（強調は原文）（SWB. 2, S. 651.）

ここでクライストは改宗について触れている。一人の庶民が熱心に額ずいて祈っているさまを見て，同じようにしたいと思いはするのだが，彼には「一滴の忘却」が足りないためにそれができない。

この書簡から約10年後、クライストが編集・発行していた『ベルリン夕刊新聞』（以下『ベルリン夕刊』）に1810年11月15日から17日付で，改宗する人物が登場する小説『聖ツェツィーリエあるいは音楽の暴力（ある伝説）』（以下『聖ツェツィーリエ』）が掲載される。この作品には『ベルリン夕刊』に掲載された版と翌11年８月に出版された彼の『小説集』に収められた版の二

1）　本稿は2019年11月９日に高知大学において開催された日本独文学会中国四国支部研究発表会での発表原稿を加筆修正したものである。またクライストのテクストは以下のものを使用し，引用文の末尾に略号 SWB とアラビア数字で巻数，ページ数を示した。Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke und Briefe.* Hrsg. von Helmut Sembdner, Neunte, vermehrte und revidierte Aufl. 2 Bände, Carl Hanser Verlag, München 1993.

つがある。[2)]

どちらの版でも宗教改革の頃のアーヘンが舞台となっている。[3)] プロテスタントのとある兄弟たちが聖ツェツィーリエ修道院で催されるミサの妨害を企てるのだが，この偶像破壊活動は彼らがミサ曲を耳にし，発狂することによって頓挫する。これを境に彼らは毎日十字架に向かって祈りを捧げ，夜毎ミサ曲を歌い上げる生活を送るようになってしまう。[4)] こうしたことは聖ツェツィーリエが起こした「奇跡」によってもたらされたものだと考えられるようになる。

『ベルリン夕刊』版と『小説集』版と版の違いはあれど，物語の中心となる聖ツェツィーリエの「奇跡」にまつわる事件そのものの描かれ方については，ほとんど違いが見られない。

> ミサ曲が至高の音楽的な美しさをもって演奏された。そしてその演奏が続く間，会堂の中，座席では息の音１つしなかった。特にサルヴェ・レギーナのとき，グロリア・イン・エクセルシスの場合はよりそうであったが，まるで3000人以上の人々で一杯になっていた教会全体がすっかり死んだようであった。その結果，４人の神を冒瀆する兄弟たちがいたにも関わらず，床の上の塵さえ動かなかった。そしてこの修道院は三十年戦争が終わるまで存続していたのだが，そのときヴェストファーレン条

2） 前者の掲載に際しては，彼の友人であったアダム・ミュラーの娘の洗礼祝いとして捧げるという献辞が添えられている。アダム・ミュラー自身はプロテスタントとしての教育を受けて育った人物であるが，後にカトリックに改宗したことが知られている。それにもかかわらず，彼は娘にプロテスタントとして洗礼を受けさせている。Vgl. Schmidt, Jochen: *Heinrich von Kleist. Die Dramen und Erzählungen in ihrer Epoche.* 3. Aufl., Darmstadt, 2011, S. 270.

3） 『聖ツェツィーリエ』は時代を16世紀末，舞台をアーヘンと設定している。この頃のアーヘンには1566年にネーデルラントで起きた偶像破壊運動と，これの弾圧により，プロテスタントの亡命者が多数流入している。その結果，総人口２万５千人中カルヴァン派が約１万人を数え，市会の多数を占めるまでになっている。これは1648年のヴェストファーレン条約によってカトリックの支配が国際的に承認されるまで続く。こうした当時のアーヘンとネーデルラントの状況については，石坂昭雄『16世紀におけるネーデルラント・プロテスタントのドイツ散住 ― その経済史的概観 ―』北海道大学『經濟學研究』第27巻第１号，1977年，322頁以下参照。

4） クライストは1800年９月13日付けの書簡の中でヴュルツブルクの救貧院について書いている際に，精神を病んだ者にも触れている。そこには黒衣を纏い，「弱いがよく響く，心臓を押しつぶすような声で〔…〕永遠の命と聖なる祈りを思い出させる」（SWB. 2, S. 560.）僧が現れる。これには，夜な夜な窓を割らんばかりの声でグロリアを歌う兄弟たちの姿を重ねることができるだろう。また，音楽についても，同地で後日書かれた書簡に「音楽の魔力」（SWB. 2, S. 569.）という言葉を見ることもできる。

約の条項によって世俗化された。（SWB. 2, S. 219.）

『ベルリン夕刊』版ではこのように書かれている。これとほぼ同じ内容のものが『小説集』版でも見られる。違っているのは「ミサ曲」が「オラトリオ」となっていたり[5)]，教会の中にいる人数が示されなくなっていたりという程度である。

しかし，後にその事件について調査をする段階になると，これらの版の間には，より大きな差異が認められるようになる。『ベルリン夕刊』版では医者が調査役を務めているが，それが『小説集』版になると兄弟たちの母親に替えられている。さらに，事件の証言役として，新たに彼らの共犯者でもあったファイト・ゴットヘルフという織物商人も加えられる。加えて修道院長の性格づけや振る舞いも，二つの版で大きく異なっている。

そんな中、とりわけ目を引くのは物語の結末部分の違いだ。『ベルリン夕刊』版では修道院が世俗化されるに際し、聖ツェツィーリエの功績を讃え、グロリア・イン・エクセルシスが歌われたという「伝説」の内容が語られている。

> そしてさらに三十年戦争が終わるそのときに，上で述べた通り，修道院は世俗化されるわけだが，伝説が伝えるところでは，聖ツェツィーリエがその修道院を音楽の不思議な暴力で救ったまさにその日のことが祝われ，静かに，そして盛大にグロリア・イン・エクセルシスが歌われたそうである。（SWB. 2, S. 298.）

一方の『小説集』版では，母親が郷里に帰り，そこでカトリックに改宗すること，兄弟たちが日々グロリア・イン・エクセルシスを歌い続け，そして老年になって亡くなったことが示されている。

> ここでこの伝説は終わる。この夫人はアーヘンでは全く用無しになったので，哀れな息子たちのためにとわずかばかりのお金を裁判所に保管してもらい，ハーグへと戻っていった。そして，この出来事に大変心を動かされ，一年後にカトリックの懐の中へと戻っていった。また息子たちは高齢になってから，穏やかで満ち足りた最期を迎えた，いつもの習慣通りにグロリア・イン・エクセルシスをもう一度歌った後で。（SWB. 2, S. 228.）

5）この作品において，クライストは両者の区別をしていない。Vgl. Hinderer, Walter: *Die heilige Cäcilie oder die Gewalt der Musik*. In: Kleist Erzählungen. Hrsg. von Walter Hinderer. Stuttgart, 1998, S. 200.

引用冒頭にあるとおり，ここでは「伝説」が終わったあとの出来事が描かれる。

この作品の副題には「ある伝説（eine Legende）」とある。『ベルリン夕刊』の方では，最後まで「伝説」が語られているのに対し，『小説集』ではその後の世界が描かれる。しかも，そこでは母親がカトリックに改宗している。ここで疑問となるのは，こうした改訂によっていったい作者は何を表そうとしたのかということだ。この作品の十年前に書かれた書簡にあったように，カトリックに改宗することの憧れが反映しているのだろうか，それとも別の何かが表されているのだろうか。以下では，「伝説」の描かれ方を中心に考察していく中で，これらのことを明らかにしていきたい。

２．「伝説」が伝えていること

まずは『ベルリン夕刊』版を見ていくことで，「伝説」がどのように描かれているのか確認していく。

先の引用にあるように，ミサの最中に演奏される曲は非常に荘厳なものとして描かれている。その場にいる者たちが皆，身動き一つせぬほどこの曲に聴き入ってしまうことで，兄弟たちの企ては失敗する。そして，この事件に続く部分の冒頭は次の一文によって始められている。「しかし，数日後に明らかになったように，宗教の勝利はさらに偉大なものであった。（Aber der Triumph der Religion war, wie sich nach einigen Tagen ergab, noch weit größer.）」（SWB. 2, S. 296.）

語り手はここで「宗教の勝利」と述べている。これは音楽によって暴徒の破壊活動が阻止できたことを指す。この勝利の偉大さがそれだけに留まらなかったことが，後に明かされていく。その内の一つは，この事件を境に兄弟たちが豹変し，毎日グロリア・イン・エクセルシスを歌う生活を送るようになったことだ。しかし，市当局に命じられた医者があらゆる調査をしてみても，修道院で彼らの身に何が起きたのかということは明らかにならない。一方，修道院の側では，事件のミサ曲を指揮したと思われていた尼僧アントニアが，実はそのとき病に伏せっており，身動きができなかったことが判明する。そうなると彼女の姿をした別の何者かが指揮を執っていたことになるのだが，これがいったい誰であったのかは杳として知れない。このように修道院が護られたという結果自体ははっきりしているのだが，それが一体何によってであったのかということは，結局誰にもわからない。

しかしトリーアの大司教だけは，この出来事の報告を受けると「聖ツェツィーリエご自身が，この同時に恐ろしくもあり，素晴らしくもある奇跡を成し遂げられたのです。（daß die heilige Cäcilie selbst dieses, zu gleicher Zeit schreck-

liche und herrliche, Wunder vollbracht habe.)」(SWB. 2, S. 298.) と主張している。他方，修道院長はこのことを「様々な理由から言いたくなかった（aus mancherlei Gründen, nicht laut zu werden wagte)」(SWB. 2, S. 298.）と，何か釈然としていないようである。それから数年後には教皇も大司教の考えを認めている。そうして，この修道院が世俗化されるときには「聖ツェツィーリエがその修道院を音楽の不思議な暴力（die geheimnisvolle Gewalt der Musik）で救ったまさにその日のことが祝われ, 静かに, そして盛大にグロリア・イン・エクセルシスが歌われる。」これを「伝説」は伝えている。

このように，最後まで修道院が暴徒たちからどのようにして護られたのかという謎が解明されることはない。この版で描かれているのは，不可解な出来事が何一つ明らかにされぬまま「奇跡」として認められていく，その過程なのだ。

３.「奇跡」を巡る人々の振る舞い

既に述べたとおり，『小説集』版では，兄弟たちの状態を調べる役が医者から母親に替わり，事件当時の彼らの様子が詳細に伝えられる。

母親は，行方の知れない息子たちの消息を尋ねるため，息子が友人に宛てて書いた手紙を頼りに，「六年経ち，この事件がとうに忘れ去られたときに」アーヘンへやって来る。『ベルリン夕刊』では，事件後数日で調査が始まっていたのに対し，こちらでは六年という時が流れ，人々の記憶の中で，この事件は一度消えてしまっている。彼女が息子たちを探す中で，人々は兄弟たちや事件について思い出していく。その代表的な人物が，この版で新たに登場するファイト・ゴットヘルフという名の織物商人である。彼もまた修道院襲撃に参加することが手紙に書かれていたため，母親の訪問を受けている。そのとき彼は、事件当時の兄弟たちの様子がどのようなものであったのか，母親に説明している。

> 〔…〕音楽が始まると，あなたの息子たちは突然，一斉に動いて，私たちの目につくやり方で帽子を取ったのです。そうして次第に，深く，言いようもなく感動しているとでもいうように，両手でうつむけた顔を覆い，そして説教師は少しの間心を揺さぶられているようでしたが，その後で突然振り返り，私たち全員に向けて，大きな恐ろしい声で，我々と同じように帽子を取れ，と叫んできたのです。〔…〕説教師は答える代わりに腕を胸の前で十字に組み，跪き，そして弟たち共々，熱心に額ずいて，少し前まで彼が罵っていた祈祷文を全て唱えたのです。〔…〕この光景にすっかり混乱させられ，哀れな熱狂者の一味は祭壇から驚くべ

き音を鳴り響かせてくるオラトリオが終わるまで立ち尽くしていたのです。（SWB. 2, S. 221f.）

このようにして彼らの計画は失敗に終わる。なぜそうなってしまったのかということについては，ゴットヘルフ自身にもわからない。だからこそ「神自身がこの敬虔な女たちの修道院を自身の聖なる守護のもとに置いたのだろう（der Himmel selbst scheint das Kloster der frommen Frauen in seinen heiligen Schutz genommen zu haben）」と考える他ないのだ。„scheint“ とあるとおり，彼自身にも確信があるわけではないことがわかる。

一方，被害を受けるところだった修道院側では，ゴットヘルフと違い，神自身が守ってくれたのだと信じ切っている。

神ご自身が［…］修道院を護ってくれたのです。いかなる手段をその際に用いたのかということは，プロテスタントであるあなたにはどうでもよいことでしょう。また，私があなたにそれについてお話できるであろうことも，お分かり頂くのはかなり難しいでしょう。（SWB. 2, S. 227.）

ゴットヘルフに面会した三日後，母親が修道院を訪ねたとき，修道院長はこのように言い放つ。この発言に続いて，彼女は，事件当時病に伏せっていたアントニア尼に代わって，一体誰がミサ曲の指揮をしたのかがわからないということを明かす。やはり出来事が不可思議なままであるからこそ，彼女は神の守護を信じているのだ。そして，ここでもトリーアの大司教は，この出来事を聖ツェツィーリエの起こした奇跡であると見なしている。最近になり，教皇がやはりこれを追認している。彼女の主張をより強固なものにするのは彼らの承認という支えである。

『ベルリン夕刊』版で，修道院長はトリーアの大司教が何の留保もなく不可思議な出来事を聖ツェツィーリエによる「奇跡」であると主張していることに対して，何か納得できていないようであった。ところが『小説集』版の修道院長は大司教と同じく「奇跡」を疑いなく信じている。これによって修道院側，つまりカトリックの側では，このことに対して疑念を抱くものがいなくなってしまっている。[6] これは大きな違いと言えよう。この違いは，上述した修道院長の性格づけや振る舞いの違いとも関係している。

6）このように説明できない出来事を神の所業と見なす者たちと，それから距離を置こうとするクライストの様子は他の作品においても見られる。拙稿『〈見えるもの〉と〈見えないもの〉― クライストの「逸話」について ―』『ドイツ文学論集』第52号，2019年，48頁以下参照。

４．二つの版における修道院長の違い

『ベルリン夕刊』の修道院長は，トリーア大司教のように，出来事を聖ツェツィーリエによる「奇跡」と見なすことを躊躇っている様子さえ見せる。ところが『小説集』の修道院長は全くそういった様子を見せない。[7] そればかりか，先に引用したとおり，こうした奇跡の捉え方に関して，カトリックとプロテスタントの在り方の違いを強調する発言さえしている。

そんな修道院長には「王のような威厳（königlichen Ansehen）」（SWB. 2, S. 225.）が備えられている。彼女は椅子に座り，龍の爪の上に置かれた台に脚を乗せている。ヒンデラーは，この姿を「敵に対して決定的な勝利を収めた君主のよう」と述べている。[8] また，龍の上に座しているかのような姿は「バビロンの大淫婦」を連想もさせるだろう。アルブレヒト・デューラーが1498年に描いた木版画「ヨハネの黙示録」の連作，「バビロンの大淫婦」で描かれるこの女性は「キリスト教徒を迫害するローマ帝国を示しているが，ローマ帝国とは版画が書かれた時代のローマ教皇庁と教皇の隠喩にほかならない。」[9] これを踏まえると，彼女を偶像破壊運動・プロテスタントに勝利したカトリックとしてではなく，むしろプロテスタントが打ち倒すべきカトリックを象徴するものとして捉えることさえできるかもしれない。

いずれにしても，このような修道院長の聖ツェツィーリエの「奇跡」に対する態度の違いからは，彼女が大司教の発言に対して疑いを抱くのではなく，それに従うように変化していることがわかる。あるいは，その発言を自分の考えを補強するものとして利用していると見てもいいだろう。「君主のよう」と権力を持った人物として描かれているのは，彼女が大司教や教皇の威を借る人物であるからではないか。「バビロンの大淫婦」を思わせる彼女の姿も，このことを裏づけている。また，既に引用したとおり，神がどのようにして修道院を護ったのかということが，「プロテスタントであるあなたにはどうでもよいこと」だと修道院長は母に言っている。カトリックとプロテスタントを峻別しようとするかのようなこの発言も，彼女がプロテスタントの敵を象徴するものの表れと見ることができる。

7）しかしこうした功績は何かによって証明されているわけではない。「登場人物たちの予断をもったものの見方」によって，そのように考えられていたにすぎない。Vgl. Neumann, Gerhard: *Eselgeschrei und Sphärenklang. Zeichensystem der Musik und Legitimation der Legende in Kleists Novelle Die heilige Cäcilie oder die Gewalt der Musik*. In: Heinrich von Kleist. Kriegsfall- Rechtsfall- Sündenfall. Hrsg. von Gerhard Neumann, Freiburg im Breisgau, 1994, S. 370.

8）Vgl. a. a. O., S. 210.

9）藤代幸一『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥 ― ザックス，デューラーと歩く宗教改革』，八坂書房，2006年，244頁参照。

もう少し修道院長の発言について考えていきたい。この「神ご自身が［…］修道院を護ってくれたのです。いかなる手段をその際に用いたのかということは，プロテスタントであるあなたにはどうでもよいことでしょう。また，私があなたにそれについてお話できるであろうことも，お分かり頂くのはかなり難しいでしょう」という言葉からは，母親が属するプロテスタントには聖ツェツィーリエの「奇跡」を理解できるわけがない，そう修道院長が踏んでいることがわかる。見方を変えると，カトリックであれば，神が修道院を護るために「いかなる手段をその際に用いたのかということは」重要であり，それを理解することができるということでもある。実際に修道院長だけでなく，トリーアの大司教も教皇も「奇跡」を認めている。やはり，この「奇跡」はカトリックには理解できるものなのだ。

5．忘我を引き起こす音楽と改宗

修道院長から「奇跡」についての話を聴いた後，母親は「この出来事に大変心を動かされ，一年後にカトリックの懐の中へと戻ってい」く。彼女に改宗を決意させた「この出来事」は，「伝説」が伝えるところの聖ツェツィーリエが「音の暴力（die Gewalt der Töne）」（SWB. 2, S. 226.）修道院を護ったことだと，ひとまずは考えることができる。

既に見たとおり，『小説集』から登場したゴットヘルフは，自分たちが破壊活動を行うべく修道院に侵入したときに体験したことを証言している。その中で彼は，ミサ曲が「祭壇から驚くべき音を鳴り響かせてくる」ものであったと述べている。こうした響きをもった音楽を耳にしたことで，兄弟たちは突如それまでとは違う様子を見せ，破壊の対象であったはずのミサに加わりさえしている。

再び曲について言及されているのは，母親が修道院長の元を訪れ，そこでこの曲の楽譜を目にする場面だ。

> 女性は〔…〕今，ぞんざいに譜面台の上に広げられたままである楽譜に目をやった。そして織物商人が言っていたことによって，次のような考えに至った。すなわち，この音の暴力が，あの恐るべき日に哀れな息子たちの感情を破壊し，混乱させたのではあるまいかと。〔…〕彼女は恐ろしい霊が奇しくも領域を画したように思われる，あの見知らぬ，魔術めいた記号をまじまじと見ていたが，それがまさに，グロリア・イン・エクセルシスが開かれていたのだとわかると，足下が沈んで行く気がした。まるで彼女にとっては，自分の息子たちを破滅させた，音の業が持つあらゆる恐ろしさが，音を立てて頭の上で鳴り響いてくるかのようで

あった。そして彼女は，楽譜を見たとき，正気を失ってしまうと思った〔…〕（SWB. 2, S. 226f.）

ここで曲は演奏されているのではなく，ただ楽譜に書かれた形で現れているにすぎない。それにもかかわらず，楽譜を見た母親の描写からは，彼女がその演奏を聴いた息子たちと同じような影響を受けている様子が窺える。「魔術めいた記号」とあることから[10]，彼女は楽譜を読むことはできないのであろう。それなのに，この曲そのものが持っている何かによって「正気を失ってしまう」かのような錯覚に囚われてしまっている。

ところで，『小説版』で見られるこれらのミサ曲に関する記述には一つの共通点がある。それはこの曲が持つ響きに関する描写だ。ゴットヘルフの証言では，オラトリオが「祭壇から驚くべき音を鳴り響かせてくる（vom Altern wunderbar herabrauschend [...]）」とあった。一方，母親が楽譜を見た際にも，彼女は「音の業が持つあらゆる恐ろしさが，音を立てて頭の上で鳴り響いてくるかのよう（als ob das ganze Schrecken der Tonkunst [...] über ihrem Haupte rauschend daherzöge）」だと感じていた。どちらの場合でも，音が鳴る様子は „rauschen“ という動詞を用いて表されている。この „rauschen“ の中には „Rausch“，つまり「酩酊，忘我」が見える。息子たちはミサの最中に „Rausch“ を含んだ響きを持った曲を耳にすることで感情を破壊，混乱させられている。そして母親も楽譜を見るだけでそうした音を感じ，正気を失ってしまうと思っている。これらは，まさに「忘我」を感じさせる。ここで描かれている曲の持つ響き „rauschen“ とは，それを耳にした者を „Rausch“ へと陥らせる，まさしく「音の暴力（die Gewalt der Töne）」と表現されるべきものなのだ。

兄弟たちはこうした忘我を引き起こす曲を耳にすることで改宗している。母親は楽譜を見て，同じように我を忘れさせる「音の暴力」の一端は体験している。そして「神の全能の下への服従や恭順の気持ちを絶えず湧き上がらせながら，楽譜に唇を押し当て」る。この後，修道院長から聖ツェツィーリエの「奇跡」を聞かされた彼女は，「この出来事に大変心を動かされ，」カトリック教徒になっている。ミサ曲によってもたらされる忘我を経験していることと改宗は，「たった一滴の忘却」があればカトリックになると書いていたクライストの言葉を思い出させる。

10）そもそもこの楽譜自体が，「大層古いイタリアのミサ曲」という現前しないものを再現させる「魔術めいた」ものである。Vgl. Lubkoll, Christine: *Die heilige Musik oder Die Gewalt der Zeichen. Zur musikalischen Poetik in Heinrich von Kleists Cäcilien-Novelle.* In: Heinrich von Kleist. Kriegsfall- Rechtsfall- Sündenfall. S. 360.

６．おわりに

母親が改宗しようとするほどに心を動かした「この出来事」は，はたして聖ツェツィーリエの「奇跡」を指すものなのだろうか。いずれの版でもそうであるとおり，実際には，どのようにして修道院が護られたのかということは誰にもわからない。それが「奇跡」であるかどうかは証明不可能なことだ。目撃者や，その証言を聞いた者たちが，そう思うことで説明をつけようとしているだけでしかない。そうすると，母親が「大変心を動かされ」ることになる「この出来事」は，「奇跡」ではなく，こうした説明できない出来事を「奇跡」だと信じ切ってしまうことができる人々の姿なのではないか。

こう考えると『小説集』版で修道院長の性格が変わっていることの説明もできるだろう。『ベルリン夕刊』版で彼女はトリーアの大司教が不可思議な出来事を「奇跡」だと認めていることに対して違和感を抱いていた。しかしもう一方の版では，むしろそうした発言を後ろ盾にして自分の考えの正しさを主張しているように見える。彼女が権力者のように描かれているのは，自分よりも力を持っているものの威を利用しているさまを示そうとしているからだと考えられる。

最終段落で「伝説」が終わった後に，母親がアーヘンから故郷に戻り，さらに一年という時間を経過しているのは，彼女が「伝説」の圏域の外に連れ出されたことを示している。そうしたときに母親の心を動かしたものは「伝説」が伝える「奇跡」などではないはずだ。むしろ修道院長を始め，不可思議な出来事を短絡的に「奇跡」と判断し，それを信じることができるカトリックの聖職者たちの姿の方だろう。

「彼は信じているのだ」とクライストは書簡に書いていた。しかし彼自身は「たった一滴の忘却」が足りないために同じように信じることができなかった。はたして彼は本当に「忘却」によってカトリックになりたかったのだろうか。少なくとも『小説集』版の『聖ツェツィーリエ』を見る限り，そうは考えづらい。それよりも，ここには不合理なことに対して疑問を抱くこともなく，盲信的に従うことのできる姿に対する皮肉が込められている，そう思わずにはいられないのだ。

Der Verlust der Sinne durch den Zauber der Musik
Die verschiedenen Aspekte der »Legende« in Kleists *Die heilige Cäcilie*

Noriaki SUGIBAYASHI

Heinrich von Kleist schrieb in einem Brief: „Mitten vor dem Altar, an seinen untersten Stufen, kniete jedesmal, ganz isoliert von den andern, ein gemeiner Mensch, das Haupt auf die höheren Stufen gebückt, betend mit Inbrunst. Ihn quälte kein Zweifel, er *glaubt* — Ich hatte eine unbeschreibliche Sehnsucht mich neben ihm niederzuwerfen, und zu weinen — Ach, nur einen Tropfen der Vergessenheit, und mit Wollust würde ich katholisch werden —.“ Hier ging es um die Konversion. Zehn Jahre später schrieb er *Die heilige Cäcilie.* Auch in dieser Erzählung geht es um Konversion. Die Erzählung ist in zwei Fassungen überliefert; die eine erschien in *Berliner Abendblätter* und die andere in Kleists *Erzählungen*. In beiden Fassungen wird über das Ereignis berichtet, bei dem vier gotteslästerliche Brüder den Vorsatz fassen, anlässlich einer Messe das Kloster der heiligen Cäcilie zu überfallen. Aber der Überfall wird durch die Musik bei der Messe verhindert. Zwischen den beiden Fassungen besteht kein Unterschied vor dem Überfall, aber nach diesem kann man einige Unterschiede finden: Ein Arzt untersucht in der ersten Fassung den Zustand der durch die Musik verrückt gewordenen Brüder und den Grund dafür. In der zweiten Fassung hingegen ist es ihre Mutter, die die Untersuchung vornimmt. Zudem wird Veit Gotthelf als Zeuge zusätzlich eingeführt. Darüber hinaus ändern sich der Charakter der Äbtissin und ihr Verhalten. Auch der letzte Abschnitt der beiden Fassungen ist in bemerkenswerter Weise unterschiedlich. In der ersten Fassung sagt die Legende, dass das Meritum von Cäcilie gefeiert wird. In der zweiten Fassung hingegen endet die Legende und dann bekehrt sich die Mutter zum Katholizismus. Ich versuche zu erklären, was durch diese Unterschiede interpretiert werden kann.

Wodurch „eine Legende“ gebildet wird, zeigt die erste Fassung: Die heilige Cäcilie, die statt der Klosterschwester Antonia die Messe dirigiert, schützt mit der Musik vor der Bilderstürmerei. Der Erzbischof von Trier bezeichnet diesen Vorfall als das Wunder der heiligen Cäcilie. Aber in der ersten Fassung scheint die Äbtissin nicht davon überzeugt zu sein. In der zweiten Fassung dagegen ändert sich die Einstellung der Äbtissin. Die Mutter besucht in dieser Fassung Veit Gotthelf, ein Mitglied der Bilderstürmerbande. Er erzählt der Mutter, was ihren Söhnen bei der Messe zugesto-

ßen ist. Ihm scheint „der Himmel selbst [...] das Kloster der frommen Frauen in seinen heiligen Schutz genommen zu haben.“ Auch die Äbtissin ist — anders als in der ersten Fassung — von einem Wunder Gottes überzeugt, obwohl sie selbst nicht weiß, „welcher Mittel er sich dabei bedient.“ Der Erzbishof von Trier und der Papst versichern übereilt, dass die heilige Cäcilie das Wunder vollbracht hat.

Die Mutter konvertiert, „durch diesen Vorfall tief bewegt,“ zum Katholizismus, nachdem sie heimgekehrt und ein Jahr darauf vergangen war. Das heißt, sie entfernt sich aus dem Wirkungsbereich der Legende. Es scheint, dass sie durch das Wunder der heiligen Cäcilie tief bewegt wird, aber meiner Ansicht nach ist es die Einstellung der Äbtissin, die sie bewegt. In der zweiten Fassung bezeichnet die Äbtissin wie der Erzbischof ohne Zögern den unverständlichen Vorfall als das Wunder der heiligen Cäcilie. Aufgrund dieser Änderung ihrer Einstellung kann die Konversion nicht als Folge des Wunders angesehen werden, sondern als Folge der neuen Sichtweise der Äbtissin, dass sie nach der Versicherung des Erzbischofs und des Papstes das Unverständliche als das Wunder Gottes begreifen will.